

# 令和7年度とうきょうすくわくプログラム活動報告書

社会福祉法人新田保育園  
0 歳児（みかん組）

## 1、活動のテーマ

土管トンネルの築山で遊ぼう



### \* テーマ設定の理由

室内の遊具やリズム運動で粗大運動や手指足指を使った遊びを繰り返してきた0歳児クラスの子どもたち。歩行が安定した子どもから、散歩より安全な赤土の庭遊びの日を徐々に取り入れる。

自分の身長より高い築山や土管のトンネルにどのような関心を持つか、どのように遊ぶかを観察し、個々の興味や身体の発達段階を知り、遊びを広げていく。

## 2、活動スケジュール

- ・ 4月～12月：室内遊びや人工芝の園庭で粗大運動や手指足指を使って遊ぶ
- ・ 1月～ 2月：靴を履いて赤土の庭で遊ぶ
- ・ 3月：裸足で赤土の庭で遊ぶ

## 3、活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・ 室内や裸足で遊べる人工芝の庭で身体全体を使って遊ぶ体験をくり返し、身体作りをする
- ・ 寒過ぎる日は避け、室内で十分に身体を動かしてから庭で遊ぶ
- ・ 活動の妨げにならないよう、厚手の衣服は避ける
- ・ 目が行き届くよう、少人数で活動する

## 4、探究活動の実践

### ◆築山にのぼったりおりたりしてみよう



初めて赤土の庭に出た子どもたち。遊具を持つ子、平地を走る子、築山に行く子と分散した。保育者が築山にのぼる前に、自らのぼる子どももいた。

・ まず足だけでのぼる A。途中で滑って手をつくが、自分で上体を起こし、時々ふらつきながらも頂上までのぼると、手をぱちぱち叩いて笑う。保育者が下から「やったー」と言うと、目を合わせて笑い、何度も繰り返しのぼりおりしていた。

・ 足だけでのぼり始めた B。途中でよろけると四つ這いになる。地面と頂上を交互に見ながら真剣な表情。四つ這いでも乾いた土で何度かずり落ちるが、頂上を目指してのぼりきる。保育者が下から名前を呼ぶと、目を合わせて笑い手を振っていた。



・保育者と数人がのぼりおりをしていると、土遊びをしていた C がやってくる。友だちが築山の上にいることに気づき、のぼり始めた。地面だけを見て四つ這いでのぼっていたところ、上からおりてきた A の足が手に触れると顔をあげる。A が迂回すると再び地面だけを見てのぼりきる C。保育者が下から「やっほー」と声を掛けるが保育者を一瞥した後は景色を眺めたりせず、前に向き直ると立ったままおりたかった。

#### ◆土管のトンネルで遊んでみよう

築山に興味を示し近づいてくるがのぼらず友だちの様子を見ていた D。保育者がのぼって上から呼びかけるがのぼってくる様子がなかったため、土管に興味を示すかもしれないと、築山の反対側の上から呼びかけ、目線を合わせてからしゃがみ、土管のトンネルに気づくようにした。トンネルの反対側から何度か呼びかけると興味を示して笑うが動かない。このやりとりに気づいた B が、D の脇から土管に入り、四つ這いで潜り抜ける。その様子を見ていた D に再度呼びかけると、しゃがんで四つ這いになり潜り抜けてくると、保育者と目を合わせ笑った。



#### ◆築山と土管の素材の違いを楽しもう

A と B と保育者で土管に入る。保育者が途中で止まり内側をこんこんとノックするように叩くと、2 人とも手のひらで真似してみるが同じ音にはならない。B は何故だろうという表情。叩くところを変えてみるがこんこんという音はせず、保育者を見る。保育者が再度ノックしてみせると、B こぶしにして叩くがやはり同じ音ではない。その横で A は手のひらで再度触れるとすぐに離れた。保育者が「冷たいね」と気づきを言葉にすると「たい」と言い何度も触れて離すことを繰り返した。B も A の真似をして「たい」と言い、友だちと保育者と目線を合わせて繰り返し土管の質感を楽しんだ。職員が靴を脱いで築山にのぼって見せると、B と C もやって来て靴を脱いでのぼり始める。この日は水まきをしたため土が湿っており踏ん張りがきいた様子で、乾いた土の時は四つ這いだった 2 人も立ったままのぼりきった。C は前回地面だけを見てのぼり、前進することが楽しいようだったが、この日は目線が上がったためか傾斜に慣れたためか頂上から下を見たり、友だちや保育者との関わりもあった。

### 5、振り返り

同じ環境下でも興味関心の向き方やタイミング、反応が子どもによって違う。体の使い方や目に見える範囲等の違いもよくわかった。また、何度か繰り返したり異なる環境下（土の質感が違う、他クラスと一緒に遊ぶなど）であることで子どもの姿にも変化が見られた。その変化や姿を記録することで、子どもひとり一人の楽しみ方や発達がより深まるため、それをもとに働きかけを含めた様々な環境設定行ない、さらに遊びを広げていく。

# 令和7年度とうきょうすくわくプログラム活動報告書

社会福祉法人新田保育園

1歳児（りんご組）

## 1、活動のテーマ

赤土の庭で遊ぼう

＊テーマ設定の理由

1歳児クラスの子どもたちは室内、戸外で見立て遊びやごっこ遊びが盛んになってきた。赤土の庭は、地面の変化や自然物がみられるため、それらを使った遊びを広げていく

## 2、活動スケジュール

4月～6月…3グループで過ごす（少人数ごとに遊ぶ）

7月～9月…水や泥の活動が増える

10月～12月…落ち葉や実などを取り入れて遊ぶ

1月～3月…クラス全員で過ごす、他クラスと一緒に遊ぶ

## 3、活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・秋ごろまではグループ別で過ごし、発達に応じた遊びを十分に保証する
- ・徐々に大人数で遊ぶ機会を増やしたり他クラスと共に遊ぶことで、遊びの展開を図る
- ・水や泥を設定する事が予め分かっている場合は保護者にも事前に周知する

## 4、探究活動の実践

### ◆赤土の地面で遊ぶ

新しい庭は公園の一つのような感覚なのかもしれない。広い土の地面を見た子どもたちは、とにかく走っていた。公園でも、遊具があまりなくひらけた地面がある公園というのは少ない。まてまて遊びが好きで、保育者に追いかけてもらいたいと途中で振り返ったり「こっちだよ」と呼んだりしながらしばらく続いた。

1人が影に気づく。自分が動くときも影も動き、その場で手や足を動かしたり体勢を変えたりして楽しんでいた。保育者が日向の地面を触り「あったかい」と言うと、子どもたちも真似て触り「あったかいね」と言う。比較してみようと日陰の地面を触りに行く。子どもたちも触り「あったかくない」と言う。保育者「なんでだろうね」と子どもたちも首をかしげて「なんで?」「なんで?」と笑い合っていた。





#### ◆階段の築山で遊ぶ

階段がある築山の上には切り株がある。その上に A が拾った小石を並べていた。保育者「おいしう」と言うと A「あいしゅ（アイス）だよ」と言うのでペロっと食べて見せる。A「ちゅめたい？」と嬉しそうに尋ねる。「冷たい！おいしい」と言うと、A「こっちもおいしいよ」とにこにこしながら他の小石もすすめる。B も落ち葉を持ってやってきた。別の切り株に並べ「おせんべ」という。保育者「くださいな」と言うと一つ取って渡す。お店屋さんのようなやり取りをしたら楽しいかなと考え、お金を渡す仕草をすると B もお金を受け取る仕草をする。すると隣で A も「いらっしゃい」とアイス屋さんを始めた。そのやりとりを見て築山の下にいた子どもたちものぼって来て客役に加わり、おみせやさんごっこへ発展していった。



また別の日、築山で保育者と子ども数名が切り株をテーブルに見立てて遊んでいると、階段の下で C が「ぴんぽーん」と言う。保育者「だれですか」C は少し考え「おばけです」と言う。「ええ！」と驚いて見せるとにこにこ嬉しそう。保育者「おばけさんも食べますか？」と誘うと、階段をのぼって来て加わる。すると上にいた 2 人が階段をおりて目線を合わせると笑い合い「ぴんぽーん」とインターフォンを押す真似をして嬉しそうに待っている。保育者が声を掛けようとする C が「だれですか」と尋ねる。2 人はにこにこして「おばけです」と言うと C とやりとりをして“おばけ”のおうちごっこが始まった。

#### ◆探索活動を楽しむ

年長クラスがまいたクローバーの種から芽が出始めた。かたまっ出てきた緑色の群れに、1 歳児りんご組のクラスの子どもたちはしゃがんで覗き込む。指で触ったり、手のひらで撫でたり、つまんでむしったりする。「これなんだろうね？」と保育者が声を掛けると「ぱっぱ（葉っぱ）」と言う。保育者「じゃあお花が咲くかもね」子「おはな？」まだ咲いていない花が咲くのを想像するのは難しいかもしれないと考え「何色のお花かな」「楽しみだね」と声を掛けた。すると「おみずあげる？」と 1 人が言う。



年長児が水やり係をしているのを思い出したのかもしれない。カップで水やりをするうちに泥遊びへと発展していった。

別の日、年長児ぞう組が築山の上で数人しゃがみこんでいるところに、1 歳児りんご組 2 人が興味を示して覗き込む。年長児が気付く「みる？だんごむしだよ」とたくさんのだんごむしが入っている入れ物を見せてくれた。保育者「どこでみつけたの？」と聞くと「こっち」と年長児が築山の奥端の落ち葉下に案内する。りんご「いないね」しゃがんで見てもだんごむしはいない。「はっぱのしたとか、いしのしたとかにいるんだよ」とぞう組。葉をめくったり石をどかしたりする様子を見て真似てみるが、「しずかにやるの！」「そっとじゃないとにげちゃうから」などとぞう組に声をかけられ、ついて行くことに徹したようだった。ぞう組が見つけると「みせて」は忘れず必ず見せてもらい、嬉しそうに笑っていた。後日、りんご組単独で庭に出た時は、自分たちがぞう組になったようにだんごむし探しをする姿が見られた。



#### ◆水や泥で遊ぶ



暑い日には水を出して水や泥遊びをたくさん楽しんだ。裸足でいいよと声をかけると大半の子どもは靴を履かずに遊ぶが、感触を好まない子や汚れることを好まない子もいるため個々の意思を尊重している。水まきも兼ねながら遊ぶ。「つめたい！」とミストに飛び込んでくる子。ミストから楽しそうに逃げる子、本気で逃げる子。「いれて」とカップを持ってくる子。泥遊び場には、りんご組がくる前に遊んでいたクラスが穴を掘って水を溜めていた名残があり、緩めの泥に足を入れてみる。「あったかい」と笑っていた。太陽で温まった泥。「おふろ」と全身に浴びる子もいた。保育者が泥の中に足を埋め、その中で足指を動かして見せる。子どもたちはこれを掘り出し、「あった」と楽しむことを繰り返していると、一人が自分の足にも土を被せ真似しようとするが、泥ではないので全体を覆い隠せず「できない」と言う。保「泥んこにしようか」と声をかけ一緒に水を汲みに行く。「お水を混ぜてごらん」とシャベルで土に水を加えてみせる。子どもも真似して加えて混ぜ足にかけてみるが、今度は緩すぎて足が出てしまう。「できない」と再び困り顔。「お水が多かったかもね。そうしたらね、土を混ぜるんだよ」と少しずつ土を混ぜ込んで丁度いい硬さになる。子どもは自分の足を隠すと「いないいない、ばあ」と足を出し、友だちにも見せて友だち同士でも遊びが展開していった。

#### 5、振り返り

築山や階段、トンネル、植物、そして土に水。様々な素材や起伏のある赤土の庭は、子どもたちの心をくすぐり、発達を促す最高の場所である。手足指を大いに使い、体幹づくりに欠かせない粗大運動が安全にできる。様々な素材を見立て、つमりの世界で保育者や友達と遊びが展開する。他クラスの子もたちと遊ぶことで、気づきや発見が広がると共に、憧れからの意欲も育まれる。そして、影、温度、感触、温度、生命の不思議や時間と共に変化を楽しむなどの科学的な発見と遊びが、保育者自身もとても楽しい。その気づきや発見や疑問を、大人がすぐに解決したり答えを示すのではなく、一緒に考えることを楽しむことが、子どもの成長発達には欠かせないと改めて感じた。

# 令和7年度とうきょうすくわくプログラム活動報告書

社会福祉法人新田保育園

2歳児（ことり組）～5歳児（ぞう組）



## 1、活動のテーマ

土と水で遊ぶ

野菜を育てる

＊テーマ設定の理由

新園庭は赤土の庭。土の変化や水との融合など自然の中での気づき、発見、実践、考察をみんなで楽しみたい

## 2、活動スケジュール

年間を通しての水遊び、泥遊び

年間を通しての土づくり、野菜の栽培

## 3、活動のために準備した素材や道具、環境の設定

庭遊び用の遊具（カップ、シャベル、バケツ、ふるい）の他、子どもがその都度必要だと感じた時に、つくったり代用することも楽しむ。揃えすぎないことも探究を楽しむための環境の一つと考える。

子どもの気づきや発見を大切にし、更なる探究心へとつなげるための投げかけを心がける。

畑での作業はなるべく素手で行ない、肥料などを扱い場合は子ども用軍手を用意する。



## 4、探究活動の実践

### ◆水と氷



冬のある日、4歳児が庭の端が湿っているのに気づく。「あめふってないのに」と子どもたち。近づいてみると土が盛り上がっている。「しもばしら！」と1人が言うとみんなが集まってくる。踏むとザクザクと音がする。そっと剥がしてみて「キラキラしてる」と太陽にかざす子や「チョコレートやさんです」と並べてごっこ遊びをする子もいた。ひとしきり楽しんだから、保育者「さっき、雨が降っていないのに何で濡れているんだろうって言っていた

よね」と投げかけてみる。「しもばしらがとけたから？」「こおりってとけるもんね」「あったかいととける」と子どもたち。「じゃあ何で霜柱ができたんだろう？」と改めて投げかけてみる。「こおりって、みずでしょ？」「みずがこおりになったんだ」「じゃあみずためてこおりつくろうよ」話が展開していく。保育者「どこに置いておく？」と尋ねると、子どもたちが意見を出し合う。「さむいところがいい」「おひさま、あたらないところ」と影になっている庭の隅に水を溜めたカップ





やバケツを並べて置いた。翌日、薄く膜が張るくらいの氷ができていて子どもたちは大喜び。すぐに溶けてしまったが、毎日水を溜め置いて帰っていた。しばらく暖かい日が続き氷ができなかったが、寒波がくると聞いた子が「きょうはぜったいできる」と言い、張り切って水を溜めた。一人が「チョコレートのこおりつくる」と泥水にして置いて帰った。週明けに見てみると、分厚い氷に大満足の子どもたちの横で、しかめ顔の子どもが一人。「チョコレートこおりじゃない」土が沈み上澄みの水のみ凍っていた。「チョコレートにしたのに」と言っていたが、改めて泥水を作り、できた氷を砕いて入れチョコレートジュースとしてお店屋さんごっこを始めた。

#### ◆土と泥で遊ぶ

初夏。乾いた土から土埃が舞う。「けむりみたい」と子どもたち。水まきをしているとバケツを持ってきて「おだんごつくるからおみずちょうだい」と5歳児がやってきた。一方では「ここ、おみずやらないで」と乾いた土場を確保する子どももいる。「あとで、さらさらのつちをかけるから」と言う。ピカピカの泥団子づくりも手馴れてきた。一緒に遊んでいた3歳児クラスの子どもたちも真似して作る。「できない」と投げだしそうになる3歳児に、「ぞう組さんに聞いてみる？」と保育者が声を掛けると5歳児が「もうちょっとおみずまぜるといいよ」「さらさら～ってかけてこするんだよ」と一緒に作り始めた。



別の日。2歳児ことり組の泥んこ遊びの日。たらいに水をため、子ども自身が必要な分だけ入れ物に入れて遊ぶ。シャベルですくう、カップですくう、バケツにくむ、別の容器に移し替える。どの遊具がどれくらいの容量か、どのように運んだらこぼれないかなど、実際に体験することを繰り返し積み重ねていく。

泥や水が苦手な子は乾いた築山で遊んでいた。山に水をかけようとした友だちに「おみず、だめ」と訴えていた。保「お水でぬるぬる嫌なんだって」と代弁する。線路に見立てて風呂マットを並べていたY。やがて数名が加わり築山の上まで繋げる。頂上から滑り台として滑り始めると「とんねるで一す」下でタイヤを持つ子も現れる。滑ってくぐってのぼるを繰り返す子、繋げたマットがずれると直す子、タイヤを持つ子、見て楽しむ子と、楽しみ方はそれぞれである。





## ◆野菜を育てる



### ・土を耕す

残っている根っこや茎を 5 歳児ぞう組と 4 歳児りす組と保育者で取り除いたあと、保育者がくわで土を掘りおこす。「なんでとるの?」「なんでほるの?」と質問があがる。保「私たちも、部屋の中で人がぎゅうぎゅう詰めだとのびのび〜って身体を伸ばせないでしょう?土も同じで、硬い土や硬い根っこがたくさんあると野菜も大きくなれないんだよ」と伝えると「わかった」と張り切って根や茎を取り除く子どもたち。長さや形や太さなどの違いの見せ合いを楽しみながら作業をする姿があった。

### ・夏野菜の苗植え

どんな野菜を育てたいか 2 歳児クラスから 5 歳児クラスで話し合い、きゅうり、なす、オクラ、ピーマン、の苗を植える。穴を掘って土を蓄えた根をそっと植えていく。「たくさんごはんまぜたから」「おおきくなってね」と土をかぶせる子どもたち。5 歳児は係活動として毎朝畑の水やりをし、他クラスも庭へ出ると畑の様子を見て乾いていると水やりをしていた。しばらくすると「いっぱいはえてきた!」雑草を野菜の葉と勘違いして喜ぶ子どもたち。保「これは野菜じゃないね。一緒に抜いてくれる?」と雑草取りを呼びかける。「野菜じゃない植物が一緒にいると、土の中のごはんをみんなに分けなきゃいけないでしょう?それを野菜が全部食べられたら、野菜が大きく育つから」と話すと「これは何の花が咲くの?」と雑草に興味を持つ子もいた。「ぬいたらかれちゃうの?」と畑の外に植え直す子もいた。

### ・収穫して食す

育てていたスナップエンドウは、2 歳児と 5 歳児が収穫。調理室に持って行き、その日の給食の一部に加えみんなで食べた。他の野菜も調理室に届けるか、塩や味噌をつけて食べた。中でもきゅうりは豊作で、毎日何本も収穫し、夏の間は八百屋の発注をキャンセルして給食が全て賄えるほどであった。もぎたてのきゅうりは「ちくちくする」という気づきや、葉っぱも「かゆい」と産毛にも気づきがあった。なすのがくにとげがあることや、ピーマンの収穫が遅くなって赤くなったり破裂したりもした。赤くなったピーマンを炒めて食べてみると「にがくない」と子どもたち。苦手な子も「これならたべられる」と嬉しそうだった。





じゃがいもは5月頃花が咲いた。「じゃがいもっておはなさくんだ」と4歳児。その後葉が枯れてもそのままにしていると「じゃがいもできないのにかれちゃった」と言う。保育者が「じゃがいもは葉っぱの栄養も土の中の栄養も全部吸って、今、土の中で大きくなっているからもうちょっとしたら掘ってみようね」と期待が膨らむよう言葉をかけた。

7月、3歳児と4歳児が収穫。小さすぎるものはじき、じゃがバターにして食べた。



## 5、振り返り

子どもの興味関心、発想は本当に面白い。しかしそれは、答えや決まりを大人が先取りして伝えると育まれにくい力である。また、思ったことを思った時に表現できる力は、大人との信頼関係と友だちとの仲間関係が基礎にある。土や水、植物などの物的環境が整っているからといって、子どもたちの意欲や関心がおのずと広がっていくわけではない。物的環境と、程よい人的環境が両方不可欠なのだということが改めてわかった。その、子どもの気づきや発見に繋がるようなほんの少しの働きかけの塩梅が非常に難しい。個々の発達と性格をとらえ、子どもたちと一緒に面白がって楽しむことで、やってみたい、やってみようという意欲に繋げていった。

土と水とは変化が多くあり、野菜は予想外のことも多い。考える楽しさ、やってみる楽しさがたくさん経験できた。